

の強味は日本の傳來的愛國心にありて政黨の弱味は、資力缺乏之其結果よりする定見の缺如にありとす。

著者は日本の國民主義の起原及發達は明治以前の封建的精神の内にあり。維新、臺灣征討、遼東經略、韓國併合及南滿經營は皆、軍國主義の賜なり。而して其半面に於ける内治の比較的進歩せざるは國民にとりては無關心の事に屬す。政府、政治家、及び國民の間に於て日本が全世界の霸王たらずとするも尙亞細亞の盟主たり支配者たり得べしとする信念斷らず表はれ來りて軍國主義は種々の政治的組織を降伏せしめ立憲的民主的政府の要求を常に抑壓しつゝありとせり。

要するに著者は我國に在住し且つ専門政治學を以て我國大學の講壇に立ち又亞細亞協會々誌の寄稿者たりことによつて、歐米人の間に割合汎く讀まれるべきものなるべく、又我國人にとりても外人の日本の政治觀として特に日本政界の病弊を痛撃するところは他山の石として見らるべし。只日本國民の大陸及海洋洲に對する領土的野心を過大に見、往々強辯に陥るものあるは外人の日本觀の通弊たるを免れざるも、亦好箇の一讀物たるべし。(西田)

● 滿蒙經濟調查復命書 第六 關東都督府刊

滿蒙調查報告の第六編にして都督府囑託古夷好氏が舊海龍府下即ち西豊、西安、東豊、海龍、輝南及び柳河の六縣の調査にして、開海

鐵道線定線沿線及び其の附近地方に關するものなり。上下二篇に分ち上編は上記地方に亘る事項を、下篇は縣別調査を載せたり。

● 支那研究

文學博士 服部宇之吉著

大日本漢文學會が支那研究の參考書として編せし服部博士の支那に關する論文の集録なり。凡て二十三篇を收む。其の題目中主なるものは、支那人の政治思想、支那の政治と韓非子、支那國民性支那に於ける道德の危機、日本文化の支那に及ぼせる影響、支那に於ける帝王神聖主義、李悝の經濟政策及び刑法制定に就きて等にして、多くは已に博エが世に公にせられたるものながら更に其面目を一新せるものあり。附録として支那風俗雜俎を添ふ。(明治出版社發行、價二、二〇)

● 孔子及孔子教

文學博士 服部宇之吉著

此書亦大日本漢文學會の刊行に係り、服部博士の論文中孔子及孔子教に關するものを收め、凡て十五項、孔子の略傳、孔子の人格、孔子教の特質、孔孟の教義と所謂異端との別を論ず、支那國民の崇祀孔子等あり、附録として支那德教の將來、支那思想と現代思想の二編を添ふ。(明治出版社發行、價一、七〇)

● 論語年譜 二冊

文學博士 林泰輔編

本書は論語の刊行、註釋書の製作、字句の引用等事務も論語に關

するものは之れを蒐め、是等論語に關する諸般の事項を史實、傳述、鈔寫、刊刻の四種に分ち夫れ夫れ年代に隨ひて列記したるものなり。論語外編及び和論語、女四書の如きその内容全く論語と同じからざるものも、尙その名を假りたるは論語流行の景況を見るべきものとして收めあり。上卷には序説として孔子の略傳、論語の編纂、周代に於ける論語の影響、漢代以後東西諸國に於ける論語流行の概觀を掲げあり。本編は即ち年譜にして尙附録として寫眞並に索引を附す。寫眞四十三葉は論語の古寫本、古刊本の傳を見るべく好參考史料たり。索引亦書名索引人名索引、論語引用語句索引に分ち用意周到なり(大倉書店、價三、八〇)

●滿、韓、地、理、歷、史、研、究、報、告 第三 東京帝國大學文科大學  
大正四年一月南滿洲鐵道株式會社の委囑により滿洲及び朝鮮の地理歴史を研究せるものにして鐵利考(池内宏)、遼の遼東經略(津田左右吉)、五代の世に於ける契丹(松井等)、遼代紀年考(松井等)元代社會の三階級(筠内五)を列載し附圖として鐵利考附圖あり。(以上那波)

●涵芬樓秘笈第一集

辛亥鼎革以來支那各地雲擾せしかご上海獨り晏如たりしかば、遺老の善本を携へ地を避けて來るもの多し。涵芬樓は公司の力を以てそれ等の諸材料を蒐羅し收藏最も富むといはる。此秘笈はそ

の中より忠傳、續墨客揮犀、復齋日記、識小錄の四種を擇びて第一集となし之を八冊に分ちて出版せるものなり。

忠傳は永樂大典の卷四八五の下半と卷四八六の原本を影印せるものにして、大典の此部は撰人を著さず。文淵閣書目亦之を載せず。大典に閣外の書を取りし一證とすべし。四庫總目には存目の部に録し、四卷ありといへど、今存する所の大典には一冊に文臣鄭の子産より蕭何孔明宋瑩范沅俺等を経て元の歸陽に至りて止まり、武臣なければ完書にあらず。四庫存目中書も流傳少く、大典に更に稀なり。その文を見るに流俗本馬融の忠經を以て主となし、宋人平話の體に倣ひ史事を引いて以て之を闡演し、每事皆畫像を附せるも、記事單簡通俗にして史上の參考に資するに足らず、惟全體の體裁を見るべし。

續墨客揮犀十卷は宋の彭乘の撰。此書亡佚久しかりしを今般宋本を得、每葉十八行每行十八字の儘本書に影刻せり。内容は隨筆體にして往々有益なる史料を含めり。

復齋日記二卷は明の許浩の撰。明代前半の朝政を記し、間々前代の別録に及ぶ。然れども正統景泰の間の土木の變攝政復辟等の事尤も詳密なり。大約葉文莊の水東日記などと相表裏し、皆一時の見聞を傳述せり。原本は柱漏錯誤甚多かりしかごよく校正して本書を成せり。